

教養講座 地元学と考える

第百三十四回「地元学と考える」
(二〇一五年二月二一日開催)

「福島有機農学校が
二本松市の
田畑での取り組み」
講師 魚住 道郎さん

福島有機農学校の想い

今から五十年前も前になるだろうか、私は農業が好きで農家の長男に生まれ、ほぼ迷わず農業を営みましたが、どうせやるなら本物の農業者・百姓になりたいと、多くの研修会等に参加して農業の学びを重ねておりました。

そんな時、日本の有機農業の先覚者の先生や先輩との出会いがあり、それまで経済的向上や重労働からの解放等を目的としていたのが、真の農業は人の健康を守り、自然や環境を守ることの大切さを知らされました。

それまで多収穫を目ざして使っていた農薬や除草剤をきっぱりとやめ

て、以来有機農業の道歩み続けてきました。

そんな折、日本有機農業研究会の視察研修会の中で魚住道郎さんの農場も視察し学んだのでした。

四年前、三・一一の大震災・原発事故によって福島の人々の農業はまったく閉ざされたと思った時、全国から多くの人々や先生方が駆けつけ、励ましと多くのアドバイスをいただきました。

日本有機農業研究会の中に東北・福島支援事業という活動が生まれ、二本松有機農業研究会を窓口として大型農機による深耕が行われ、放射能の低減がはかられました。年二回の援農によって福島に来て共に働き交わりながら福島を理解し、協力体制がとれれば、ということでした。

それらの活動を通して「福島有機農学校」として我々の田畑を教室として開校しようという提案が魚住さんよりなされ、この困難な福島の地と農業を有機農業によって新た

な出発点として再生したいという思いが、私たちと一致して発足したのでした。

原発事故により福島がこれほど苦しみ、事故も収束せず廃炉の見通しも立たず、核燃料の廃棄物処理の見通しもないのに原発再稼働に進むのは、安全・安心より経済優先の「今だけ・金だけ・自分だけ」の思いに日本が流されているのだろうか。

日本の食糧自給率の低さ、なのに遊休地が増える現状。食物の安全より安さや、添加物、見た目を飾ろうとしての販売合戦。原発に頼らない再生可能エネルギーの道に課題は多い。

二本松では新規就農者を含めて若者も有機農業を目ざす者が多い。その技術と販売確立のために共に働き、労りたい。食べる人と一緒に学んで福島の有機農学校が用いられるなら幸いなので

最近の私の思いは、福島の農地を作物や花で飾り、日本一安全な作物の生産地にするのが夢です。私達は全国から多くの

支援を受けました。その感謝として、我々よりもっと困難な地でご活躍している多くの方達に、私達が受けた励まし何分の一でもお返ししたい。

そんな思いで今日も野良に出る。(大内 信一)

今回の感想は二本松有機農業研究会・会長の 大内信一さんに寄稿していただき、ありがとうございました。農業への思いが伝わった。感想をありがとうございます。(T・O)

〈雑感〉

魚住さんの農業に向き合う姿勢に感動させられます。人間を大切にすること、自然を大切にすること。山から海へ、大自然の営みの中で生かされている。有機農業とは、その自然の

営みに従っていくことの実践であることを教えられる。人は、支えあって生きていく。

「農家の人たちの畑を自分の畑と思えば良いのです。」物を買うことに慣れすぎている現代、必要としている人が作る人と一体になつていくことこそ物づくりの原点。農業とは、人間の在り方そのものであることを知りました。ありがとうございます。(T・O)



3・11 と「雨にもマケズ」 — 「切らないで」とりんで今年も花が咲く (川柳) —

＜講師＞油井 憲一 さん (方言の語り部)
＜日時＞2015 年 4 月 25 日 (土) 13:30～15:00
＜会場＞まちなか夢工房 2 階 (参加費) 500 円

＜講演内容＞

3・11 と原発事故の W 体験から、早ひもので 5 年目の春が訪れてきた。その間全国の賢治の心を持った方々の「やさしさ」に助けられて生きてきた。これからは自分達が賢治の「つよさ」をもつて生きてゆかねば――。

今回は岩手の賢治の「雨二モマケズ」と福島の憲一の「フグシマがらの便り」のコラボである。福島に生れ福島の土に帰りたい百姓の叫びである。

*参加人数把握の為、地元学講座各回ごとに出席のご連絡をいただければ幸いです。(tel 024-524-2230 または fax 024-525-8285 までお願いいたします)

*4 月以降も地元学会場は引続き「まちなか夢工房 2 階」にて開催いたします。

教養講座 地元学と考える

第百三十六回 予告